基準値のからくり　安全はこうして数字になった

村上道夫，永井孝志，小野恭子，岸本充生　著

286ページ，定価920円＋税
（講談社，2014年6月）

環境中の有害物質の測定には基準値（評価値）がつきものです。その有害物質の測定方法はその妥当性について学会や論文誌で議論されますが，基準値は国や国際機関の委員会等で決められます。議事録は公開されているものの，直接議論の場を見る，または参加する機会はあまりありません。「そうだから」，「スペシャリストが決めたのだから」とあまり気に留めず受け入れてしまうことはないでしょうか。

最近では一般の人も，東日本大震災に伴う原発事故での放射性物質や中国から飛来する$PM_{2.5}$など，基準値に右往左往したのは記憶に新しいことと思います。（これも本書で触れられています）

本書は，ブラックボックス化されている基準値設定までの道のりを，“基準値誕生に潜む10のミステリー”として紹介しています。“自称基準値オタク”のスペシャリスト（著者）が“飲食物の基準値”，“環境の基準値”，“事故の基準値”の3部構成で，私達の生活に身近なものから，こんな事にも基準値があったのか！という事まで，実例を挙げて根拠を示しています。

しっかり調べられた上での解説が興味深いのは勿論ですが，本文以外も読み応えがあります。少しご紹介するとまえがきでは，“なぜ「お酒は20歳から」に決まったのか？”というテーマ。これは選挙権を有する等，“20歳からは「成年」だから”なのですが，本書では“なぜ成年は20歳と定められたのだろう？”というところまで掘り下げて解説されています。突き詰めれば，お酒とその健康影響との関係が根拠ではないことに驚きます。

そして，プロローグでは，“基準値によくある四つの特徴”が示されており，この特徴を知ると基準値を見る目が変わるのではないかと思います。

また，本文中の各所にちりばめられているコラムも面白いです。“「3秒ルール」は科学的か”では，そのルーツがチンギス・ハーンまでさかのぼること，このテーマを科学的に検証した研究者がいることを紹介しています。“セクハラの基準値”では，セクハラの判断基準が“平均的な感じ方”となっており，男性と女性で2つの基準値が存在することを指摘しています。

本書は，基準値誕生までに驚きを感じ，隅々までとても面白く読むことができます。また，私達が何気なく使っている基準値についても今一度，考え直すきっかけとなると思います。そして，読んだ後には，他の人にも勧めたくなるような（筆者もある先生から勧められた）一冊です。

（産業医科大学産業保健学部　山本忍）